

掌編賞受賞作品

韓国さんと僕

海見  
みみみ

僕の知り合いに韓国さんという人がいる。もちろんあだ名だが、別に彼が韓国人というわけではない。彼は大の韓国嫌いなのだ。

韓国さんは口を開けば「韓国の文化的侵略がうんぬん」とどうやらインターネットで仕入れたらしい知識を使って演説を始める。ちなみに本人は韓国に行ったことや、韓国人とトラブルになったことは実際にはないらしい。

そう言った事情で周りから影でつけられたあだ名が韓国さんという訳だ。なんとも皮肉なあだ名だと僕は思う。

僕が韓国さんと出会ったのは大学のゼミで、彼とは知り合い以上友人未満の関係を築いていた。周りの友人達は韓国さんの演説に辟易し彼を嫌っている。そんな彼を僕は見捨てられなかった訳だ。

もちろん韓国さんは僕に対しても『如何に韓国が悪い存在であるのか』毎日のように口にしてくる。しかしその話を聞けば聞くほど「彼は韓国のことをインターネットで余程調べているんだな」と思い、次第に「実は韓国のことが好きなのではないか」とすら感じるようになっていった。

その日、僕は先輩に誘われ渋谷まで食事をしに行くことになっていた。なんでも先輩曰く格

安で美味しい料理を出してくれるお店があるというのだ。その誘いに韓国さんも便乗して急遽ついてきた。さすがの韓国さんも安くて美味しいものには目がない訳だ。僕達はお腹を十分空かせた上で待ち合わせ場所のハチ公前に向かった。

ところが三人で合流すると、突然先輩の顔色が変わった。それから先輩は「店を変えるか、でももう予約してあるし……」と何やら独り言を呟き、迷っているような様子を見せる。

「大丈夫ですか？」

思わず僕が声をかけると、先輩は目を見開きながら僕に詰め寄った。

「お前が保護者役だからな、いいな？」

一体何のことかはわからないが、とりあえず先輩からの命令なので頷いて答える。それからすぐに歩き出し、僕達は先輩の言う安くて美味しいお店に向かった。店の前につくと、そこには一つの看板が置かれている。その看板に書かれた文字を見て、僕は先輩が口に使っていた言葉の意味をようやく理解した。

### 【韓豚亭】

お店の看板にはそう書かれていた。つまりここは名前から察するに韓国料理を出すお店なのだ。更に先輩の態度から考えると、きっと店員さんも本場の方なのだろう。

これはとんでもない地雷を踏んでしまった。ちなみに韓国さんはまだこのお店がどのような場所かわかってない様子で「お腹空きましたねえ」と呑気に口に行っている。その呑気さに僕の気はずしりと重くなったような気がした。

「いらしゃいませー」

お店の中に入ると店員さんが独特のイントネーションで出迎えてくれた。それからすぐに予約した席に通してくれる。

そこはまさに異国だった。銀色の食器が並び、ドラム缶の様な椅子が無造作に置かれた客席は何だかとてもワイルドだ。ちなみに床は何故かスケートリンクのようにつるつるしている。とても先ほどまで居た渋谷と同じ場所とは思えない。まるで一瞬で異国に来てしまったかのような感覚だった。

この頃になると韓国さんも事情を察したのだろう。彼は顔を真っ赤にしながらプルプルと震えていた。

「メニュー、何しますか？」

店員さんが独特のイントネーションでこちらに問いかけてくる。すると先輩は「サムギョブサル三人前」と簡潔に注文を述べた。

店員さんが注文を聞き厨房に向かった後、いよいよ韓国さんの大演説が始まる。

「サムギョブサルなんて豚肉を切って焼いただけの下品な料理じゃないですか。いや、料理と呼ぶことすらできません。そんな下等な物を僕は食べられませんよ」

韓国さんの言葉に先輩が顔をしかめ、僕は慌てて「まあまあ」とフォロワーを入れる。何とも居心地の悪い雰囲気だ。

そんな居心地の悪さを破ってくれたのは、意外にもお店の店員さんだった。

「これ、どぞ」

机の上にネギのサラダ、キムチにナムル、それに熱々のスンドゥブが次々と置かれていく。

「あの、僕達サムギョブサルしか頼んでないんですけど」

「これ、サービス、どぞ」

その言葉に僕は驚かされてしまった。僕らはたった一品しか注文していないのに、こんなにもサービスで料理を出してくれるのか。こんなことは他のお店では経験したことのないことだ。

これには韓国さんも驚いたようで、机の上に置かれた料理を見て目を白黒させている。

「キムチなんて辛いだけの下品な食べ物だ。あんなものをサービスで出されたって……」

何やら小声で呟いているが、韓国さんが動揺しているのは目に見えて明らかだった。

「それじゃ、焼きますね」

続いて店員さんが豚肉の乗った皿を片手に、テーブルに備え付けられたホットプレートで肉を焼き始める。豚肉は「それで本当は三人前なのか？」と聞きたくなる程大きく、尚且つ実に

美味しそうだった。ホットプレートに豚肉が置かれた瞬間、じゅわあという音と共に胃袋を刺激する魅力的な匂いが辺りに漂う。それは脂がたっぷり乗った肉の焼ける匂いだった。じゅうじゅうと音を立て豚肉は焼けていき、ある程度するとそれを店員さんがひっくり返す。豚肉からは脂が滝のように流れ出し、その光景が空腹の僕には余計に堪らなく見えた。

「この脂、凄い、だから床も、すべる」

店員さん曰く、お肉の脂が多すぎて床までつるつるになってしまいうらしい。これで一つ謎も解けたというわけだ。

豚肉を両面焼くと店員さんは銀色のハサミでそれを綺麗に切り分けた。それから別の店員さんがサムチュを持ってきて「これもサービス、おかわり自由」と言い去って行く。

こうして僕達の目の前には焼きたてのサムギョプサルと様々な韓国料理が用意された訳だ。

僕達はいただきますという挨拶すら忘れて、目の前の肉に食らいついた。サムチュに肉を巻き、タレをつけて食べる。口の中で豚肉の旨味と脂のコクが一体となり、それが舌の上で幸福感をもたらしてくれる。

サムギョプサルは驚くくらいに美味しかった。それだけじゃない、ネギのサラダやキムチにナムル、それにスンドゥブに至るまでどれ一つ手抜きがなく美味しいのだ。

僕たちは汗をかきながらただ無言で極上の韓国料理を食い尽くしていった。

「これもサービス」

ところが料理はまだ出てきた。今度は生のタコだ。それをホットプレートでキムチと共に焼いてくれる。途端にキムチ独特の刺激的な香りが鼻を撩り、満腹になりかけたお腹に更なる食欲をもたらしてくれた。

店員さんがちゃちゃつと作ってくれたキムチとタコの焼き物はこれもまた絶品であった。豚肉の脂とキムチの旨味をたっぷり吸ったタコはまさに美味の一言だ。

気がつくとも僕達はあつと言う間に満腹になっていた。

「これ、デザート、サービス」

そう思ったらまだサービスが続いた。今度はバニラ味のアイスクリームだ。脂ぎった豚肉を食べた後に食べるアイスクリームはとても爽やかな口触りでこれまた実に美味しい。

なんて幸せな気分なんだろう。僕はあまりの満足感にポーッとしてしまっていた。ふと隣を見る。すると韓国さんも僕と同じようにポーッと幸せそうな顔をしていた。いくら韓国嫌いでも、これだけ美味しいものを出されたら文句は言えないわけだ。それが滑稽に感じられて、僕は心の中でくすりと笑っていた。

全ての料理を食べ終え僕達はお会計をした。するとなんと一人辺り千五百円で済んでしまった。あれだけ出された料理は本当にサービスだったのだ。その事実にも再び驚かせる。

お店の外に出るとそこにはいつも通りの渋谷の街が広がっていた。ごみごみとしたビルやお

店に囲まれた都会的な街。先程までの光景とは大違いで、なんだか短い海外旅行から帰ってきたみたいだった。

「どうだった？」

先輩がいじわるな笑みを浮かべ韓国さんに問いかける。僕も韓国さんがどのような反応をするのか気になり、ニヤニヤとしながらその様子を伺っていた。すると韓国さんはなんとも複雑そうな顔をして、こう呟いた。

「韓国は嫌いですが、ここの料理は好きです」

まったく、素直じゃないな。そう思っただけ笑っていると韓国さんは不機嫌そうに頬を膨らませ、そっぽを向いてしまった。

今まではインターネットの世界でしか知らなかった韓国という国。その一端に韓国さんは今日触れた。

果たして彼はこれからも【韓国さん】と呼ばれるような言動を繰り返すのか、その命運はこの渋谷のサムギョプサルにかかっているのかもしれない。

# 韓国さんと僕

作者 海見みみみ

第四回 「俺的小説賞」 応募作品 20 掌編賞受賞作品

この作品の著作権は全て作者に帰属します。  
無断転載は禁止しています。